

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

目 次

第1回：何故、メルマガ『予算会計を学ぶ』を始めたのか	P 2
第2回：わんぱくの幼少時代	P 6
第3回：雀荘通いの高校時代	P 9
第4回：挫折と浪人時代	P11
第5回：青春グラフィティの大学時代	P13
第6回：まさかの経理配属（商社時代）	P15
第7回：生死を分けた登山	P20
第8回：会計士試験への挑戦	P26
第9回：めぐまれた監査法人時代	P31
第10回：開示書類作成ソフト開発へ	P36
第11回：ベンチャー企業の起業へ	P42
第12回：会社経営の道	P45
第13回：もう一つの夢を追いかけて	P49

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

第1回目

～何故、メルマガ『予算会計を学ぶ』を始めたのか～

大学卒業後、商社の経理部門、監査法人を経て、会社を起業した。

たまたま「経理担当者」「会計士・税理士」「経営者」という3つの立場を経験してきた。それぞれの立場に対して少なからず思い入れがある。

「経理担当者」の時代には、「経営者は何故、管理部門を軽視するのか」「数値にもとづく経営が重要であり、会計を深く理解する必要があるはずだ」と思っていた。

「会計士」の時代には「経営者は何故、監査を軽視するのか」「リスクが多い時代の中で、経営の姿をオープンにし、監査と正々堂々対峙して行くべきではいか」と思っていた。

今「経営者」の時代の中にいる。

経営者の頭にあるのは次の2つの点だ。

「(お金)：社員等の生活を守って行く為に、いかに収益をあげ、利益を上げて行くべきか」

「(人)：その為に、社員のベクトルをどう一本化して、オフバランスの人財価値をいかに最大化して行くべきか」

経営者は、「過去」ではなく、99%「将来」の方向を向いている。

「何故、経理担当者は、未来志向の経営の観点での良き相談相手になってくれないのか？」

「何故、会計士や税理士は、未来志向の経営の観点での良き相談相手になってくれないのか？」と多くの経営者が感じていると思う。

それだけ会社を継続させて行くことが難しい時代に入っているのだ。

「経理担当者」「会計士・税理士」「経営者」の間には「大きな心の溝」がある。

お互いに信頼し合う「夢のトライアングル」の構築が日本経済が復活して行くために絶対に必要だと信じている。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

そのキーワードが「予算」である。

デフレの時代が長く続いている。物の価値は下がり、お金の価値が上がって行く時代だ。企業の成長戦略において「買収戦略」や「自己株式の市場からの買取」等の手段は重要だ。でも、お金がなければその選択は取れない。

「キャッシュ・フロー経営」の重要性を疑う経営者は誰もいないだろう。

ところが、目標としての「予算キャッシュ・フロー計算書」は作成されていない。

予算損益計算書の作成に留まっている。

実績の財務諸表は、原則として過去の記録の積み上げであるが、国際会計との整合性の観点から「予測概念」が多く入って来ている。

たとえば、退職給付会計や減損評価や繰延税金資産の回収可能性や資産除却債務などである。時価評価も予測概念に入るだろう。

I F R Sでは「将来キャッシュ・フローの予測に資する」という点が重視されるので、さらに予測主義が加速する。

実績財務諸表の適正性は、「予測の正確性」が担保されなければならないのである。粉飾決算は跡をたたず、資本市場の発展に大きなブレーキがかけられている。

犯罪である粉飾決算は、何故起きるのだろうか？

上場会社は、決算短信で業績予想を発表している。

投資家はこの指標を重視して、「株を買う、保有し続ける、株を売る」という経済的意思決定をしている。

業績予想の売上高の10%以上、利益の30%以上、予想値からかい離すると判断した場合には、すみやかに業績修正と修正理由を発表しなければならない。

下方修正で合理的な理由がない場合、投資家の信頼を失い、株価が暴落する危険性がある。

経営者は、「何としても業績予想を実現する」という強いプレッシャーを受け、結果として経理操作による粉飾決算へと繋がるリスクがあると思う。

もし、業績予想が「営業キャッシュ・フロー」で示されるとしたら、経理操作しても

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

意味がないので、粉飾決算の芽を実質的につむことができるはずだ。

内部予算が粉飾決算の引き金になる場合もある。

A事業は年率10%で成長しており、B事業は逆に年率10%で縮小しているとしよう。

A事業部門の目標売上高を当期比10%増加に設定することは合理的だが、B事業部門の目標売上高を同様に当期比10%増加に設定されたら、実現は限りなく不可能に近い。

B事業の営業マンは、業績達成により賞与査定が決まるとしたら、「何としても目標売上高を達成しなければ」という強いプレッシャーがかかり、与信上の危ない先に販売したり、「経理操作してでも目標売上高を達成したい」という衝動にかられる危険性は常にあるだろう。

もし、営業部門の予算目標を「営業キャッシュ・フロー」に設定し、その目標達成により賞与等の人事評価がなされる仕組みに変わったら、「危ない先には売らない」し、「経理操作をしても意味がない」し、「できるだけ回収サイトを短くする努力をする」はずではないか。

連結経営において、連結子会社等をコントロールすることは難しいが、連結経営方針の予算目標を営業キャッシュ・フローに設定すれば、同様のリスクは大きく回避され、連結ベースのキャッシュ・フローの改善に繋がるだろう。

与信管理や滞留債権の回収等の対応の管理コストも自動的に削減されて行くはずだ。

会社は「人」であり、「人の意識」が変わらなければ「会社」も変わらない。

つまり「キャッシュ・フロー予算制度の重要性を共に理解する教育基盤」が必要になる。実績財務諸表を作成する理論が「会計」である。

しかし、予算財務諸表を作成する理論は世の中に存在していない。

そこで、「予算財務諸表を作成する理論」を「予算会計」に名づけることにした。

ここでいう予算財務諸表とは、「予算損益計算書、予算株主資本等変動計算書、予算貸借対照表および予算キャッシュ・フロー計算書並びに月次資金計画書」をいう。

2011年7月から、メルマガ「予算会計を学ぶ」をはじめた。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

素朴な気持ちとして、「会計業界をもっと夢のある世界にしたい」と心から思う。

メルマガ読者のみなさんと「予算会計」を軸として、「教育」「システム」「コンサル」の「新しい会計人の活躍の場」を一緒に創っていかれたらと思っている。

メルマガを通じて本音で語り合う為には、まず発信者である私の「ありのままの姿」をお伝えするのが最初の一步だろうと思っている。

そこで、若い会計人の方に自信をもってもらいたいという気持ちを込めて、「私の履歴書：脱線奮闘記」を第2回以降記載させていただくことにする。

メルマガ「予算会計」がこれからの時代を担う若い会計人のための一助になれば、この上ない幸せだ。

第2回 ～わんぱくの幼少時代～

今は亡き、美空ひばりの歌に「川の流れるように」がある。母の好きな歌でもある。昭和32年9月に東京で生まれた。東京都の足立区と北区の境にある「荒川」と「墨田川」の間の中州なのか島なのか、「新田」という所で生まれた。

祖父、祖母、伯父、叔父、伯母、叔母、いとこ、妹と12人で一緒に暮らしていた。初めての男の子だったので、みんなに溺愛されたようだ。

(1) 「幼いコンプレックス」

ある日、までゼロ歳で歩けない時に、「歩行器」に乗せられ、「両脚が凹脚に曲がってしまった」らしい。母があわてて、病院につれて行き、先生から「成長とともに少しずつ治ります。」と言われて、「ほっと」したという。

.....

幼稚園の運動会に、大勢の親戚が応援に来た。「ダントツのビリ」だった。子供ながら「恥ずかしさのあまりの赤面」した。

私の人生は、「コンプレックス」からのスタートだった。

でも、小学生の高学年の頃には、ほとんど治っていたと思う。

(2) 「誘拐事件の危機一髪」

昭和38年3月に、「吉展(よしのぶ)ちゃん誘拐事件」が起きた。私と同一歳だった。その年、小学校に入学した。自宅から北区の王子駅へバスで出て、JR京浜東北線で2駅先の田端駅まで通っていた。当時は非常に珍しかった。

行きは、父親と一緒に学校まで送ってくれたが、帰りは一人で家まで帰って来た。

.....

冬のある日、JR王子駅の階段を降りていると、誰かがランドセルを引っ張っている。

「僕。チョコレートあげるから、おじさんと一緒に遊びに行こう。」

と私に声をかけた。

私は、「人さらい」だと思い、首を横に振り、走って、改札の車掌の所に行った。

「あの人、人さらいなんです」と一生懸命に繰り返しましたが、相手にされませんでした。

その男は切符販売のボックスの角から半分顔を出し、私が出てくるのを待っていた。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

今でも、その光景は頭に残っている。

一時間ほど経って、その男の顔がなくなり、走ってバスに飛び乗って、家に帰った。家で母親に、そのことを真剣に説明し、地元の小学校に転校を懇願した。小学校1年生の3学期から地元の小学校へ転校した。

(3) 「子供には子供の社会がある」

小学生の頃は、まさにの悪ガキで、近所の家の屋根から屋根を飛びまわって、「いたずら」の限りをつくした。

「今日は何をして遊ぶか?」「どんないたずらをするか?」をいつも考えていた。

家の前には、5階建のビルの会社があり、塀をよじ登り、内部を探検したり、大人をからかったりして遊んでいた。

「メンコ」「ビーダマ」「相撲」「柔道」「忍者ごっこ」「ローラースケート」「三角ベース野球」「セミヤバツタ取り」「さかな釣り」……。

今、思い返しても、本当によく遊んでいたなと思う。

.....

小学校2年生の頃だったと思うが、母親が「●●ちゃんは乱暴だから、一緒に遊ぶのは辞めなさい。」と言った。

私は、「子供には子供の社会があるんだ。大人にはわからないんだ。」と言ったと記憶している。

「権威や権力とか、常識というものが本当に嫌いだ」という私の性格はすでにこの時に形成されていたのかも知れない。

(4) 「転校生の友達」

時々クラスに転校生が編入してきた。私はいつも声をかけて、すぐに友達になった。「新しい友達を創りたい」という気持ちもあったと思う。

家内が高校生の娘に、「あんたは新しい友達とばかり遊んで、もっと昔からのお友達を大切にしてください。」と、言っているのを時々聞く。「ああ、DNA だな。」と思う。

(5) 「ギターと Creation」

中学の時、ギターを買ってもらった。我流だったので、上達はしなかったが、よくアドリブで「作曲」をし、3歳下の妹に無理やり聞かせていた。「思春期のフラストレーション解消」には本当に役に立った。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

娘が十代の頃には、娘を観察しながら、よく曲を作ったりした。

「世にない新しいものを創りたい」という「Creationの情熱」は、ここから生まれてきているのかも知れない。

(6) 「中学時代の同窓会」

50歳を過ぎて、毎年の中学時代の同窓会に参加するようになった。

「一瞬にしてお互いに、中学時代に戻れるって、凄いな。」と思う。振り返ると、「ほとんどすべての原点がここにある」と思う。

(7) 「脱線から学ぶ」

娘が幼稚園に入る時に、「面接試験」に連れて行かれた。
園長先生がこう質問した。

「子供の教育・成長においては、正しいことを教えるだけではなく、悪いことを子供に伝えることも大事だと言われていますが、どうお考えですか？」

家内は、想定外の質問に舞いあがっていた。

私はこう言った。

「人は、『病気』になって初めて『健康の大切さ』を知ります。
極端ですが、『戦争』を経験して、はじめて『平和の尊さ』を理解するのかと思います。
許される年齢に許される失敗や脱線をして、はじめて『何が本当に大切か』を学んで行くのではないかと思います。」

まさに「脱線の連続の幼少時代だった」と思う。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

第3回～衝撃とともに始まった高校時代～

小学校、中学校は隅田川と荒川に囲まれた地元の小さな街にあった。
1972年の春、都立足立高校へ入学した。ビートたけしの母校でもある。
入学式に出た時に、ビックリした。

「リーゼントの学生」「下駄をはいた学生」「彼女と肩を抱き合っている学生」
「ケンカをしている学生」……。

みんな15歳だ。「不良の集まりか」と思った。
それでいて、「私より、成績が上」。「何とも情けないやら」……。「衝撃」を受けた。

.....

日本橋近くの歓楽街から通っていたあるクラスメートがいた。
俳優になれるほどのイケ男だった。彼がある日、こう言った。

「児玉。女は、『どうしたら付き合えるか』じゃなくて、
『どうしたらキレイに別れられるか』が大事なんだ。」

彼女と付き合ったこともない私にはとても衝撃的な言葉だった。

● 自由を謳歌

学生紛争が終わった後で、「自由すぎるほど自由な」学校だった。
学生服もなく、自由な服装だった。今なら許されないと思うが、ほとんどの学生が
たばこを吸っていた。先生も実質黙認していた。高校1年は水泳部に在籍していたが、
高校2年からはほとんど「雀荘通い」だった。教科書はすべてロッカーに入れたまま。
一時間目が終わると、仲間のアイコンタクトで扉を乗り越えて、学校を脱出した。

雀荘のオヤジさんとは、本当に顔なじみだった。
午前中から夜遅くまでマージャンを毎日していた。
母親から、「何でいつもこんなに遅いの？」と聞かれると、

「図書館によっている」と嘘をついていた。
「いい大学に行くことが、最良の道」というのが「常識の時代」だった。

『大学は何のために行くか』がわからないのに、大人の口車に乗ってガリ勉して何に
なるんだ。」

「それより、今しか味わえない時間をエンジョイした方がイイじゃないか。」

生意気ざかりだったので、そう思っていた。

試験の途中で脱出し、喫茶店へいていたこともあった。

それでも、落第のない学校だった。

そんな訳で、成績は、「510人中の最後の10人」が「雀荘仲間」だった。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

夜は時々、友人に誘われて、ディスコにも行った。
「ジェームスディーン」が人気で、映画の「理由なき反抗」を真似て実践していた様にも思う。
当時、ショーケン（俳優：萩原健一）と水谷豊のドラマ「傷だらけの天使」がブレイクしていた。
みんなその服装や行動をマネしていた。

● 親不孝

卒業式の日、ロングコートを着て仲間と近くの喫茶店へ行った。
「そろそろ行くか」と言って、卒業式の会場へ向かった。

会場に入ると、すでに卒業式が始まっていた。

担任の先生が生徒を一人一人読み上げ、生徒が「はい」と返事し、順番に「起立」していった。生徒の後ろ側に「父兄来賓席」があった。

「今さら、生徒席には行けない！」・・・

しょうがないので、最後尾の父兄来賓席に座った。母親の後ろ姿が見えた。
担任の先生が「児玉」と読み上げたが、返事がなかった。少しざわめいた。
母親もとまどっている様だった。

「親不孝をしてしまったな・・・」と、さすがに思った。

第4回 ～挫折と浪人時代～

● 先のことは考えずに

「何の為に大学に行くのか？」とタンカを切ったものの、
「じゃ、大学に行かないで何をするのか？」と問われれば答えが出て来ない。

結局、高校時代のマージャン仲間と一緒に東京の山手線の大塚駅にある「武蔵予備校」
(今はない)へ行った。

でも、結局毎日、雀荘に行くか、喫茶店に行くかの繰り返しだった。
ビートルズやキャロル（矢沢永吉がいたバンド）の歌を聞きながら、
「どうしたらあの娘と付き合えるか？」といった話ばかりしていた。
先のことなんて全く考えていない。

「今日が楽しけりゃいいじゃないか。」という調子だ。

年が明けて、受験の日来た。すでに19歳になっていた。
こんないい加減な受験生に神様がほほ笑むはずもない。

● 本気になろう！

ある日、たまたま2つの大学の試験発表日が重なった。
母が「自分が結果を見て来る」と言ったので、「結果はわかっているんだから、見に行くな！」
と言った。

私が1つの結果発表を見て帰って来ると、母が悲しそうに、うなだれていた。

「だから見に行くなと言ったのに・・・」

でも、この時、私は思った。

「母の顔に泥を塗られたな。」

「母が受けた屈辱はどうしたら晴らせるのか？」

「・・・やはり、それは大学に合格することしかないんだろうな。」

「たとえ、大学に行く意味がわからなくても。」

私は、生まれて初めて、「本気で勉強しよう。」と決心した。

マアジャン仲間とも付き合いを完全に切って、あらゆる遊びの糸を断ち切った。

予備校の近くの巣鴨図書館へよく通った。暗記が苦手な、歴史や古典が嫌いだった。

本を読む習慣もなかったのも、国語も苦手だった。

自分の頭にも理解できる様に、「オリジナルのサブノート」を愚直に、試行錯誤を
繰り返して作っていった。成績は飛躍的には伸びなかったが、ボトムから人並みの
ところまで近づいた。

● 人生初の挫折と這い上がり

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

年が明けた1月15日に、学習院大学で予備校の模試があった。
試験が終わって、都電の駅に向かって歩いていると、あちこちに晴れ着を着た若い女の子が歩いていた。

「今日はやけに晴れ着を着た娘が多いな。正月も過ぎたのに。」

「あっ！そうか」「今日は成人式だ！」

「待てよ。俺も20歳だから、成人だよな。」

「社会から完全にドロップアウトしているんだな。」

「まさに悲しき20歳だな。」

「まあ、身から出た錆だからしょうがないか。」

と苦笑した。

その年の2月に大学受験し、何とか埼玉大学経済学部合格することが出来た。

私の人生の「最初の挫折」であり、泥だらけで何とか這い上がった二十歳の春だった。

第5回 ～青春グラフィティの大学時代～

● 青春グラフィティの毎日

20歳で埼玉大学の経済学部へ入学した。自宅からバスで王子駅まで行き、京浜東北線で北浦和まで行き、バスに乗って、埼玉大学のキャンパスに行くルートだ。

1時間20分程かかる。周りには喫茶店の1件すらなかった。

「陸の孤島だな」と思った。

もう、マージャンは止めようと思っていたが、まもなく大学の仲間との「雀荘通い」が再開した。入学して間もなく、運転免許を取った。

.....

高校3年生の時、「アメリカングラフィティ」という映画を見た。

1962年、カリフォルニア北部の小さな田舎町を舞台に、ハイスクールを卒業し東部の大学へ出発しようとする若者たちが彼女を車に乗せて、ドライブして、最後の一夜を破天荒にエンジョイする映画だ。

まさに、良き仲間と、毎日が映画の様な「青春グラフィティ」だった。

4年間で10万キロを走った。

.....

入学間もない時、英語の外国人講師が彼女にこう言った。

「He is a wolf (ウルフ)！」

「だから、付き合うのは止めた方がいい。」

今は車に乗っていないが、私の運転免許書には昔からの免許書が順番に入っている。

当時の20歳の写真を見ると、「確かに、とがっていたな」と思う。

● アメリカングラフィティ

4年生の時に、ホテルでアルバイトをして、一人でアメリカのシカゴへ行った。

飛行機が遅れ、真夜中のオヘア空港に着いた。人がいない。

タクシー乗り場に、130キロぐらいの大柄のイエローキャブのタクシーの黒人運転手が立っていた。

「どっかに連れて行かれて、殺されるのではないか？」と一瞬不安に思った。

モーテルに着くと、部屋の窓には鉄格子がされていた。

「恐ろしい国に来てしまったな。」あまり眠れずに朝が来た。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

.....

大学に入学する為の「英語学習のスクール」に入学した。大学キャンパス内にあり、その寮（ドーミトリー）に入った。2人部屋で、アラブ人と一緒だった。いつもお祈りをしていた。

私が時々お酒を飲んで帰ってくると、
「ミスターコダマは、何故、『悪魔の水』を飲むのか？」
と言っていた。

国費で来ていた学生だ。

でも、「グッド ガイ」で非常に親しくなった。

「イタリア人」「フランス人」「アフリカ人」「インド人」「中国人」「韓国人」「コロンビア人」・・・たくさんの国の学生が集まっていた。

彼らと一緒にいると、「世界中にはたくさんの常識があるんだな」と感じた。

.....

週末は、レンタカーを借りて、仲間たちとドライブに出かけた。まさに「アメリカングラフティ」だった。

当時、「1ドル260円台」だったと思う。

本当はアメリカの大学に留学して、世界中の国の友人を作って、将来旅が出来たらどんなに素晴らしいだろうと思っていた。

でも、当時の私にはお金がなく、わずか3カ月しか滞在できなかった。
行きはたった一人で来たオヘア空港だったが、帰りは多くの友人が見送りに来てくれた。

「I Love Chicago .」 「I´ll be back !」 と心の中で叫んだ。

● 社会人に

日本に戻り、間もなく就職活動が始まった。
「もう一度、シカゴに行きたい」と思い、鉄鋼商社の貿易部門の希望で内定をもらった。

私の人生の中で、「本当に自由奔放に生きた、最高の4年間」だった。

その後訪れる坂道を登る時も、「あれだけ楽しい時代を過ごしたのだから、少しは坂道登らないと、神様に怒られるよな。」と何度となく思った。

卒業し、社会人としての初日、鏡の前で、はじめてネクタイを締めた。

「俺もついに、社会の鎖につながれるのか。」

と何とも言えない「敗北感」を感じた。

第6回 ～まさかの経理配属（商社時代）～

● 監獄へ入れられたような気分

大学を卒業し、社会人としての第一歩を迎えた。

新入社員の入社式と新人研修の為、鉄鋼商社の大阪本社へ行った。
配属の辞令が順番に言い渡された。

私は当然、自身の希望「貿易部門」の意向を人事担当者に伝え、その旨了解されていると100%思っていた。

「 児玉厚 財務部経理課 」

と読み上げられた時は、正直耳を疑った。

「何故、私が経理なんだ！ 話が違うじゃないか！」と心の中で叫んだ。

「辞令をたたきつけて、辞めようか」とも思った。

もう一度、アメリカへ行く為、商社に入ったのに。

しかも、自分が最も苦手で、嫌くない事務作業の経理なのか。

社会人になった初日に、「崖から突き落とされた」気分だった。

.....

東京に戻り、財務部経理課に配属された。

4月なので決算の真っ最中で、新人をフォローする様な状況にはなかった。

経理の専門書を渡されて、苦痛な読書から始まった。

意味もなくトイレに行ったり、階段を昇り降りした。

監獄に入れられた気分だった。

● 社会人とは何たるか、を知る

ある日、財務部の先輩が飲みを誘ってくれた。

3件くらいハシゴをしたと思うが、ベロベロに酔っぱらった。

翌日、私は完全に二日酔いだった。とても仕事どころではなかった。

その先輩も同じ状況のはずだった。

・・・が、そんなそぶりも見せず、
一心不乱に仕事をし、昼食の時間も仕事を続けていた。

「遊びと仕事の『ON』と『OFF』をちゃんと切り替えられるのが社会人なんだな。」
と教えられた。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

.....

経理課の課長や諸先輩方もみんな素敵な人で、実践的な経理のイロハを深く教えてくれた。

入社した年は、飲まない日が1年の内、3日ぐらいしかなかった。

もちろん、給料は酒代に消えていった。

冬も夏のズボンをはいていたので、真冬に横断歩道を走って渡ろうとして、「足がつってしまう」ことが何回かあった。

● 仕訳の裏にあるドラマを知る

年が明けて、私は「振替伝票」の担当になった。

伝票は、月に400枚ほどある。 商社だったので、輸出や輸入や建設機械の割賦販売等、かなり複雑な取引があった。

.....

ある日、私が印鑑を持ちながら、「振替伝票」を見ながら考えこんでいると、上司の経理課長がこう言った。

「児玉。取引内容がわからなかったら、営業を回って聞いて来い！」

それから、毎月「振替伝票」をもって、一つ一つの取引について各部署の営業の先輩に聞いて回った。

もちろん、二度と同じことを聞けないので、毎日、ノートに取引内容をまとめていった。

「お忙しい中すいませんが、この伝票の取引内容について教えていただけますでしょうか？」

経理が営業へ聞きにくるとは珍しいこともあり、新人でもあったので、「しょうがないな。これは.....。」と丁寧に説明してくれた。

「●●さん。知らなかったな。営業は本当に大変ですね.....」

仕訳の裏には色々なドラマがあるんですね。」と言うと、俺たちの気持ちわかってくれるかということで、満面の笑顔になった。

飲み連れていってもらったりして、だんだん仲良くなって行った。

こういうヒアリングの活動をして行くと、逆に営業の方が経理に相談してくるようになってきた。

「よっ！児玉。ちょっと、教えてくれよ。」

「今度、こういう取引をしようと思うんだけど、 税務上何か問題あるのか。」

「税務上こういうリスクがあるので.....について覚え書を結んでおいた方が良いと思います。」.....と答えると

「ありがとう。助かったよ。」と笑って、帰って行く。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

事実が起きてからでは会計処理を変えるわけにはいかないが、事前に事実としての取引をどう行うかを検討するというとなので、営業にとってもリスクヘッジになるし、結果として社内評価を上げることにもなる。

経理の業務が「事後的な仕事」から「事前の仕事」に変わって行った。

いつしか経理課の周りに相談用の机がいくつ用意された。

● 経理部と他部門との人間関係構築がもたらすもの

当時の経理セクションの最大のミッションは、「国税調査対応」だった。

3カ月は入っていた。今はそんな事はないと思うが、当時の国税調査は「刑事」の様な態度だった。経理の話なんかはほとんど聞かない。

営業マン個人を呼び出して、ヒアリングしていた。

事前に反面調査等を終えているのに「すいませんが、私は何にも知らないんですが、少し、教えていただけますか？」と丁重に聞いてくる。・・・

営業マンはつついしゃべり過ぎて、ボロをだし、国税調査管の想定シナリオにはまって行く訳だ。

もし、営業マンの嘘がバレたら、どなり始めて、手帳を取り上げ、机の引き出しを勝手に開けていったりしていった。

国税調査対応においては、ベクトルは同じなので、「営業と経理は運命共同体」になる。

この対応がうまく行くと、経理と営業との間の信頼関係はさらに進む。

経理が、「●●さん。月次決算早期化の関係で、・・・お願いしますよ。」と言うと、「わかった。・・・に指示しておくよ。」ということで円滑に問題解決して行くことになる。

「そうか。経理は単なる事後的な事務作業をする所じゃなくて、他部門との人間関係を作り、できるだけ事前の経営判断の方に時間をとって行く事が重要だな。」と思った。

.....

もちろん、営業等の諸先輩と仕事上対立する局面も多々ありました。

私は、「どうしたら自由奔放に生きて、憎まれない生き方ができるか」を考えていた。

私が実践したのは、

「口論等になった場合には、必ず次の朝一番に謝りに行くこと（自分が正しい場合であっても）」だった。

「●●課長。昨日は本当に申し訳ありませんでした。●●課長のお立場からすれば、当然・・・ですよね。ただ、経理の立場から見ると、・・・の問題があり、ひいては・・・という形で、●●課長の部署にも何らかの影響があると思ひまして、つつい言いすぎました。ご勘弁下さい。」

●●課長も、怒りのこぶしを下ろさざるを得ない訳です。もし、この謝罪が先延ばしになると、陰湿な人間関係になり、「修復不能」に陥いる。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

こういう朝一の謝罪を繰り返していると、「こういつはしょうがないな。」とあきれて、本音で話し合える関係が出来てゆきました。

● 「尊敬できること」と「思いやり」

経理の業務を通じて感じたのは、「女性を敵に回したら、一步も前に進まない。」ということだ。

入社した時に、貿易部門で新入社員の歓迎会があり、部外者であったが、私も誘われた。ディスコで行われたが、ついつい大学時代のノリで、騒いで飲んだ。

「新人の児玉君って、何か生意気じゃない。」という噂が広がった。

まさに、逆風からのスタートだった。

オセロでいると、「すべてが黒」の状態から始まり、一つずつ「黒を白に変える」地道な努力が続いた。

女性は、肩書きなんて眼中にない。「ダメな男は、ダメな男」という評価だ。オベッカを使っても逆効果。

「尊敬できること」と「思いやり」の二つが大切だなと思った。

「尊敬できること」は、「仕事で結果を出す」ことだ。

例えば、国税調査での営業への追求を一緒に回避できた場合などだ。

「思いやり」は、平時ではなく、本当に悩んで、困っている時にさりげなく手をさしのべることだ。

仕事以外でも、一緒に飲みに行ったり、テニスをしたり、スキーへ行った。

.....

入社して3年たった時に、女子社員で「どの部署に入りたいか」というアンケートがあった。

「児玉さん。どこが一位だと思う。・・・経理なんだって。」

「エ～。商社で働きたいのが経理っていうのは、おかしいでしょ。」

でも、嬉しかった。

もちろん、魅力のある上司や先輩の存在が大きかった訳ですが。

.....

こんな事件もあった。

ある日、いつもの様に、仕事の後に先輩達と飲んでハシゴをし、渋谷へ行った。歩いていると、ゲームセンターにパンチを測定する機械があった。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

「おい。ちょっとやって見るか。」ということで、順番にマシンにパンチして行った。

翌日もまた飲み会があり、隣に座った女性がこう言った。

「児玉さんの右手って、はれてない？」

「えっ。そう？」

と右手を見ると、確かに赤く腫れている。

次の日、病院へ行った。レントゲンを見て、「骨折ですね。ナックルの骨が砕けてます。」

全治三カ月だった。

右手に「ギブス」をはめられて、会社に戻った。

さすがに上司が見かねて、

「児玉、どうするんだ？それじゃ経理の仕事できないだろう。 治るまで、休んでいいぞ。」
と言った。

私はこう言った。「いや、やります。」

それから「左手人生」が始まった。

幸い、右手で書く字も下手だったので、左手での字も違和感はなかった様だった。

確かに、右手を使えないと、顔を洗う時も顔の半分しか洗えない。

「右手が使えないというのは、確かに不便なもんなんだな」と感じた。

よく他の社員から「児玉は経理課の招き猫だよな。」とからかわれた。

色んな思い出があるが、「社会人としての私のすべての原点」は、「この商社の経理時代」にあることは間違いない。

「経理に配属された」のは、「自分に最も欠けている点について、修業しなさい。」
と神様に言われたのかもしれない。

第7回 ～生死を分けた登山～

● 自分らしい生き方が見えない

朝、東京駅の階段を降りると、「巨大な人の流れ」が続いていた。

「自分は一生この流れの中で生きて行くのか」「果たして、それが自分らしい生き方なのか」

周りの人に恵まれ、毎日は楽しかった。

でも、「自分自身は何も成長していない」。

そんな気がしていた。

.....

会社の近くに、東急百貨店があり、昼休みに屋上で寝転がりながら、

「本当にこのままで良いのか」

と考えていたが、

・・・結論はでなかった。

● このままでは死ぬ！

財務部の後輩に、高校から大学までワンダーホーゲル（登山）をしていた「ポパイ」の様な男がいた。

「ナイスガイ」だ。

よく、土日に埼玉大学の中のテニスコートで長時間テニスをしていた。

4月初めのある日、彼がこういった。

(後輩)「児玉さん。山に登りませんか。」

(児玉)「登ったことがないよ。」

(後輩)「道具は全部用意します。」

連れて行かれたのは、「八ヶ岳」で、まだ深い雪に埋もれていた。

登山の服に着替えて、「アイゼン（滑らない様にする為の鉄のツメのある履き物）」を履き、「ピッケル」を持たされた。

彼は、登山道ではなく、垂直に登りはじめた。腰まで雪に埋もれた。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

「おい、嘘だろう。」と心の中でつぶやいた。

.....

早朝から登り始めて、午後2時頃に頂上に着いた。
快晴で美しい山々が連なっていた。
写真を撮ろうとして、雪がやわらかくなっていたので、私はアイゼンを脱いだ。
雪渓（せっけい）の方へ歩いて、笑ってポーズを取った。

ちょっと、足を滑らせた。

最初は、笑っていたのだが、どんどん加速して滑っていった。

「これはやばい。このままでは死ぬ！」

おそらく40キロくらいのスピードはすでに出ていたと思う。
たまたま岩をけて、ピッケルを立てて、ようやく止まった。

「もし頭から滑っていたら」あるいは、「ピッケルを持っていなかったら」
・・・私はこの世にはいなかったと思う。

「山は恐ろしい。もう二度と来るまい。」と思った。

ただ、だんだん日がすぎると、何となく「美しい思い出」と
「達成感」だけが残って行く様な気がした。

● 神様へ誓う

その年の秋、例の後輩が再びこう言った。

「児玉さん。また、登山に行きませんか？
今回は4日間ですけど。」

私は、断ると「恐いんですか？」って言われそうだったので、
「しょうがないな。わかったよ。」と承諾した。

.....

その登山コースは、北アルプスの「槍ヶ岳から北穂高岳縦走（4日間）」で、
槍ヶ岳(3,180M) 大喰岳(3,101M) 中岳(3,084M) 南岳(3,032M)
北穂高岳(3,106M)の尾根に行く、日本の登山道の中で
「3本の指にはいる難コース」ということは後で知った。

.....

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

彼は 50 キロ、私は 30 キロのリュックを背負って、夜明け前から歩き始めた。

私は前を向くことができない。

ただ地面を見ながら、鼻先から汗が地面に落ちて行くのを見ながら登っていった。

素人だったので、登り方を知らず、つま先から歩いたので、ふくらはぎがパンパンに張っていた。午後 4 時。すでに 12 時間が経過している。

山小屋が 200M 上に見える。

でも、足が本当に一歩も動かなくなった。

仕方がないので、そこでテントをはった。

「寒さ」と「熊か何かに襲われるのではないかという恐怖」で、ほんとど眠ることはできなかった。

.....

翌日、槍ヶ岳の頂上に行き、そこから尾根の縦走が始まった。

右も 3 千メートルの崖、左も 3 千メートルの崖だ。

両手と両足の「4 点」のうち「1 点」だけを動かして進むという「3 点キープ」で進まなければならない。

一瞬でも気を緩めれば、確実に転落死する。

.....

3 日目に入り、登山の仕方も慣れて来た。

彼が私の 3M ほど先をカメラをかけながら、登っていた。

彼のカメラのキャップが落ちて来て、私の左の 3M ほど下で止まった。

私は、「とってあげよう。」と、降りて行き、小さな岩に腰かけ、キャップを口に加えて上がろうとした。

ところが、

右手を伸ばして岩をつかもうとしても、岩が川のように流れて行く。

左手を伸ばして岩をつかもうとしても、岩が川のように流れて行く。

3000M の尾根は、歩いている所は堅いが、それ以外は「風化してしまっている」というのを知らなかった。

岩が流れて行く。その先は 3000M の崖だ。上の登山道に一行に登山者が並んだ。

「ロープを投げてくれ。」

と叫んだが、誰も持っていなかった。

「死ぬな」

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

と思った。

「俺、明日の朝刊に載ってしまうな。母には本当に申し訳ない。・・・」

と走馬灯の様に頭を駆けめぐった。

右手でつかもうとしても、左手でつかもうとしても、岩が流れて行くだけだった。

座っている岩が流れて行けばもう終わりだ。
とにかく必死だった。

岩の割れ目が右手にひかかった。
全体重をかけたらどうなるかわからない。

その先のことはよく覚えていないが、
「何かの力」が働いて生還することができた。

私は、「神様に助けられた！」と100%確した。

今でも、その時の恐怖は忘れられない。

.....

翌日、ヘリコプターの音がした。
外へ出ると、滑落した遭難者をつり上げていた。

自分もこうなっていたかも知れないな。

あらためて戦慄が走った。

「下界にいて、毎日生きているのは当たり前と思うが、3000Mの山では、数分先も生きているか否かはわからないんだな。」

山小屋から見える雲海の向こうに、富士山が美しく光っていた。

「神様に助けてもらった命。

神様に恥じない様な生き方をして行かなければ」

と心に誓った。

● 無謀な行為。そして、公認会計士。

年が明けた。鉄鋼不況は続いていた。
色んな節減の為の指示が「通達」という紙で回覧された。

「何故、経営者がここに来て、頭を下げて、願うことができないのか。」
と思った。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

週休2日制から完全週休2日制（祭日があれば、土曜出勤）への通知がされた。
社員向けの説明会が開催された。

.....

私は、無謀にも担当役員へ「経営者批判」を演説した。
周りのみんなは、「よく言ってくれた」と強くうなづいた。

途中で、離席した。

恩人の上司にお詫びをし、辞表を提出した。ずいぶん慰留された。

その時、私は28歳を超えていた。

当時は、28歳を超えていると、「上場会社へ再就職できない」という年齢制限があった。

(恩人の上司)「児玉。これからどうするんだ？」
(児玉) 「税理士試験でも受験しようかと思っています。」
(恩人の上司)「税理士試験は働きながら受験できるから、
公認会計士を受験した方がいいんじゃないか。」
(児玉) 「公認会計士ですか・・・」

財務部の経理課の社員は知っていたが、他の社員は知らなかった。

誰にも挨拶をせずに退社した。

一人一人の方を前にすると、
「不覚にも涙を流してしまいそうだった」から。

私は、300人くらいの社員、一人一人へお礼とお詫びの手紙を書いた。

女性の先輩の社員で、一人だけ「私を良しとしない」方がいた。

その方にも手紙を書いた。

思いがけなく、返信の手紙をもらった。

「児玉さんの言うことは、いつも正しかったです。
ただ、素直になれなくて、申し訳ありません。
・・・新しい道で頑張ってください。」

本当に嬉しかった。

● 「私のDNA」

「生死を分けた登山」の体験が、「会社を辞める」という「危険な選択」をさせた。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

私の人生は、「計画的な人生ではない」。

「サイコロを振って進む、双六（すごろく）人生」だ。

これは、「私のDNA」なんだろう。

この時、社会人として、「最初のサイコロを振ったのかな」と思う。

第8回 ～会計士試験への挑戦～

● あまりにも高すぎる壁

29歳になる年に会社を辞めて、公認会計士受験専門学校に通い始めた。多くの若い、優秀な学生達が集まっていた。彼らの暗記力は凄まじかった。1時間に60ページの内容を暗記する人もいた。

「毎年彼らの様な優秀な学生が 公認会計士試験に参入してくるのか。」

暗記が大の苦手な私にとっては衝撃的なことだった。

受からなければ、社会復帰はできない。

「自分はどのように戦えば勝負になるのか。」

途方に暮れた。

.....

学生時代のマージャンのことを思い出した。

マージャンにとって「運」は大事だ。

「運」がある時は、誰でも勝つ。

「平時」の時は、「セオリー」が大事だ。

でも、「運」を失った時には、「セオリー」は通じない。

上がろうとすると、どんどん蟻地獄に落ちて這いあがれない。

とにかく「ひた向きの姿勢」で「愚直」に進んで、「運」を引き寄せるしかない。

これは、人生も同じではないかと思っていた。

今はまさに「逆境」だ。

とにかく自分らしく愚直にひとつずつ積み上げて行くしかないと思った。

自分の頭に整理される様に試行錯誤でオリジナルのサブノートを作っていた。

まさに「うさぎと亀の戦い」だった。

.....

母親は、近所の人に

「おたくのお子さん、30歳になって無職なの？」

と言われて、恥ずかしい思いをしていたと思う。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

何とか受からなければという気持ちは、日に日に強くなっていった。

● 学力ではなく、精神力

1回目の受験時は実力不足で無理だった。

2回目は、受かる所までの能力にはなっていた。それなり自信は持っていた。「ゴールは近い」と思っていた。

.....

試験会場は、早稲田大学だった。7月の梅雨があけて、夏になっていた。受験仲間とJR高田馬場駅近くのホテルに前泊することになった。あいにく工事中で、窓があかない形になっていた。

早く床についたがなかなか眠れない。近くを散歩したりもした。でも、なかなか眠れない。あせりがあせりをよんでいた。やがてあたりは白く、朝が来た。

受験会場に着いた。

もうろうとして頭が働かない。

初日の「簿記論」と「原価計算」でもろくも碎け散った。

.....

自宅の畳に寝転びながら、

「自分はどうしてあんな精神状況になってしまったのか？」

「いくら勉強しても、試験当日に精神状況が崩れれば、一生受からないじゃないか？」

そんな思考がループしていた。

ため息しか出て来ない。

「駄目だ。このままではノイローゼになる。」
と思い、自宅近くの土手を走った。

走り終わると、汗が出て、根拠のない希望の風を感じた。

土手を降りて、図書館へ行った。
「精神・心」のコーナーの本を片っ端から読んでいった。

なるほど、人間には「自意識」と「潜在意識」があるのか。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

自分の「自意識」で「試験に受からなければ」と思い。

「潜在意識」に「絶対に受からなければならないという恐怖を与えていた」のかも知れない。

「自意識」と「潜在意識」のバランスを崩したから、このような結果になったのか。

「自分自身の心に向き合う」ことが重要だと思った。

「自分には覚悟ができていなかった。」と思った。

「覚悟」とは、「受からない場合の自分も受け入れる」ことだ。

「世間がどう評価してもいいじゃないか」

「所詮、100年後はみんな等しく墓の下なんだから」

「神様からみて恥じない生き方をして行こう」

そんな事を自分に言い聞かせていた。

その日から、朝晩2回、40分間、「座禅」をすることにした。

鼻から「6つ息を吸って」、口からゆっくり「12、息をはく」。この40分は異常に長く感じる。

「俺は何を焦っていたんだ。」

「時間はこんなにゆっくり流れているのに」

この座禅は、「集中力を上げる」のに大いに効果があった。

.....

次に、何か楽しみが必要と思い、一日一句「川柳」を作ることにした。

王子駅から自宅まで歩くと40分かかる。

そこで、風景を観察しながら、川柳を創っていた。

「なかなか乙だな」と思うし、自分の心のありようを客観的に表すので、心の整理にもなった。

今メルマガで「ほっと川柳」を書いているのも、この時からの流れだ。

.....

もう一つ、心の強さは体力に裏付けられるので、毎朝6時30分からプールへ行き、1500M泳いでいた。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

泳いだ後は非常に集中力があがった。

● 覚悟を固める

お金が底をついていたので、アルバイトを探した。
ある税理士事務所へ面談に行って、断られた後、自宅に電話がかかってきた。

「監査法人の方でアルバイトを募集をしているので、会ってみたら」と。

日本橋兜町近くの先生の事務所で面談し、監査法人の監査を週3日手伝うことになった。

非常に人格の高い先生で、先輩の先生方とともに非常に可愛がってもらった。

時々、飲みに誘っていただいたり、マージャンに誘われることもあった。

ただしばらくして、
「試験に受かった人と受かっていない人が机を同じくしてはいけない」と思った。

「挑戦者としてハングリーな所に身を置くべきだろう」

「1年限りとしよう。次回不合格であれば、辞めよう」と。

また、次回不合格であれば、自宅も出ようと思っていた。

「牛乳配達でも、新聞配達でもしても、やり抜こう」と覚悟を決めていた。

知識を維持するだけで、ほとんどプラスアルファの勉強はしていなかった。

唯一、税理士試験の「簿記論」等の過去問を、本番の120分を90分に短縮して
「どれだけの得点が取れるか」の練習をしていた。

● 挑戦にピリオド

3回目の公認会計士試験日がやって来た。

やはり前日は眠れなかった。

朝6時30分からプールへ行き、いつもの様に1500M泳いだ。
風呂に入りながら、「いよいよ試験か」と気合が入った。

.....

試験会場にいても、信じられないほど落ち着いていた。

自分の中では、最高の出来だと思った。

唯一心配だったのは、初日の午後の原価計算の試験中に

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

5・6分ほど眠ってしまい、「計算ミスをしていないか」という点だった。

受かっていない場合のアルバイトや引っ越しの段取りの準備もしていた。

.....

9月の試験発表日、いつもの様にプールで泳ぎ、大手町の合同庁舎の発表会場へ行った。
自分の受験番号を見つけた。

思わず「やったぜ！馬鹿野郎！」と心の中で叫んだ。

「やっと、社会復帰できる！」

私の人生で、この時ほど「喜んだ瞬間」はないと思う。

.....

公衆電話から、自宅へ電話した。

「受かったよ。」

というと、母が

「良かったね。・・・」

と言って、泣いていた。

「やっと親孝行ができたかな」と思った。

.....

会計事務所へ合格の報告をし、正式に監査法人への入所が決まった。
多くの友人が祝福してくれた。

受験している時は、「何とか見返してやろう」と思っていた時もあった。

でも、受かった時には、「みんなへのただただ感謝の気持ち」しかなかった。

受験の壁を越えて、「人間的に一步成長できた」様に思った。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

第9回 ～めぐまれた監査法人時代～

やっと会計士2次試験に合格し、正式に監査法人の職員となった。
晴れて「社会復帰できた！」という思いが、私の本当の気持ちだった。

監査法人は、独立した会計士の集まりだった。

私のボスの事務所は、証券会社がひしめく兜町、東京証券取引所の近くの中央区日本橋にあった。まだ、立会場があり、活況を呈していた時代だった。

近くにある監査クライアントへ訪問した。「会計士補 児玉 厚」という名刺を渡した。「児玉先生。おめでとうございます。」
「先生はやめて下さいよ。児玉でお願いします。」と思わず言った。

会計士試験の合格を機に、「無職のアウトサイダー」から「先生」と呼ばれる様になり、この激しい変化に戸惑った。

監査のクライアントは、みんな優良企業で、ボスとの深い信頼があり、問題や論点は事前に相談があり、監査で訪問するときには、大きな問題は解決済であった。

朝10時に監査先へ行き、11時30分に昼食へ行き、13時から再開し、16時に終わるという流れで、実質4時間半の仕事だった。

監査がない時は、事務所で自由に調べもの等をしていた。

気前の良いボスで、昼食や夕食をよくご馳走してくれた。

最初の給与をもらった時、「これしか仕事していないのに、こんなに給料をもらっていいの？」というのが本音だった。

監査の出張に行っても、昼と夜に接待がある時代だった。

もっとも日本全体が「バブル」の時でまさに異常だった。

その当時、私が買える株式は一つもなかった。

兜町はバブルの絶頂で、若い女性や男性がはぶり良く歩いていた。

まさにお祭り騒ぎだった。

当時、ある証券会社の新人の女性のボーナスが2百万円と聞いて、驚いた。

監査調書をふろしきに包んで運びながら、

「人間は額に汗して働かなければいけませんよね。」と負け惜しみを言っていた。

私は本当に人に恵まれていました。

私には、「ボス」と10歳上の先輩会計士の「2番目のボス」の二人のボスがいた。

「ボス」は、顔立ちは上品で温和で、まるで「公家」の様だった。

でも、大変な苦勞人だった。九州の五島列島で生まれた。

中学の時に父さんが急死し、高校へ進学を断念した。

生計を立てる為、漁師など数十の仕事をしてきた。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

「学校に行きたい」という気持ちが強く、長崎のそろばん学校の講師を経て、三十歳を超えて東京へ上京した。

通信教育を経て、仕事をしながら、大学に入り、税理士試験を1回で合格し、公認会計士2次試験を1回で合格し、大学院へ行った。

指導していた大学教授から「大学は色々ドロドロした所で、遅咲きの君の夢が花開くことは難しいので、資格があるんだから監査をやった方がいい。」というアドバイスを受け、同大学教授が所属していた監査法人へ入り、監査を続けてきた。

大変人望のある方で、監査先からも税務先からも絶大な信頼を受けていた。決して権威を振りかざさず、温和で、あまり多くを語らなかった。

でも時々、ポツと言う。

「児玉君。人間は感謝して生きなきゃダメだよ。」

「児玉君。監査はパーソナルなんだよ。」

「児玉君。監査報告書にサインするというは、覚悟を決めることなんだ。」

今思っても、深い言葉だ。

ボスを見ていると、「私は一生かかっても超えることは出来ない」と思った。

でも同時に、

「将来このボスに近づく為には、本当に厳しい所に身を置かなければいけない。」とも思っていた。

後年、ボスは監査法人の理事長に就任した。

任期満了後、スッと監査法人を辞めて、2番目のボスに監査業務を引き継いだ。

私は、会計士の「士」は、「サムライ」であり、「士(サムライ)の心(ココロ)と書いて志(ココロザシ)」だという理念を持って、監査の道に入ってきた。

でも、色々な疑問が影を落としていった。

当時、監査人と上場会社の社長が面談をする機会はほとんどなかった。

経営者から見ると、「会う意味がない」と思っていたに違いない。

「経営者と対峙しないで、本当の監査は成立するのか」という疑問を常に持っていた。

また、会計を取り巻く原理原則や法令もその理念を失おうとしていた。

会社法の前身である商法は、配当可能利益の厳格な規制を設けていた。

2000年3月「税効果会計」が導入された。

1991年のバブル崩壊後で、すでにデフレーションに入っていた。

当時、私は「当然、繰延税金資産について、商法上配当規制が設けられる」と考えていた。

でも、商法にそのような規定は設けられなかった。

「商法も理念を失ったな。」と思った。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

会計基準で最も重要な原則は、「継続性の原則」であったが、デフレーション経済の中、実質的にその意味を失う局面に入っていた。

「デフレーション経済の中で、どうしてインフレーションを前提とする税効果会計が今、制度導入されるのか？」という疑問を持っていた。

翌 2001 年 3 月「時価会計」が導入された。

経済学でいう無限の供給者と無限の需要者がいるマーケットである「完全競争で決まる時価は意味がある」と思うが、需給バランスですぐに崩れる時価で有価証券等を時価評価して、財務諸表に反映して、どういう意味があるのか？」と思っていた。

今思えば、国際会計基準の部分導入が始まっていたということだが、その当時は全く知らなかった。

会計士としての監査の理念や志は、もろくも崩れ去っていった。

1998 年 12 月から証券会社が免許制から登録制に変わっていた。監査はあいかわらず従前の「上げ前据え膳」の世界にあぐらをかいていた。

「こんなあんのんとした監査を続けていたら、いつか足元をすくわれる時代が来るのではないか」という漠然とした危機感をもっていた。

監査よりむしろ、「お客様が喜んでくれるシステム化支援」へ傾斜して行くことになった。

また「将来経営者と対峙できるプロにどうしたらなれるか」ということを真剣に考える様になって行った。

「2 番目のボス」は、大学時代は文学部で、ボクシングをしていた。

音楽系の会社に入り、30 歳を過ぎて会社を辞め、働きながら苦勞して 2 次試験を受け、監査法人に入ってきた異色の人だった。人望があり、すでに多くの税務クライアントを抱えていた。

「会計士も監査を辞めても食べて行ける、経済的独立性が大事だ」と言っていた。

よくお酒を飲み、非常に可愛がってもらった。

3 次試験に合格し、会計士を登録し、税理士の登録もした。

「児玉君。税務の仕事をやってみないか」といわれ、最初の税務の仕事を任された。税のことは全くわからない。

税務担当の 20 代のスタッフが親切にイロハを教えてくれた。

日暮里に「医療法人の新設」を行う仕事だった。

当時医療法人の新設は、個人の医師が開業して、実績を積んだ後でないと、東京都の認可が下りなかった。

でも、依頼者の社長の要求は、「個人開業を経ないで、医療法人を新設したい。」

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

ということだった。

何十回となく都庁に通い、なんとか「医療法人の認可」が下りた。

ある日、依頼人の社長と飲みに行った。
社長は、大学を中退して上京し、20数年間様々な事業を行って来たつわものだった。

かなり酔いもまわって来て、社長がこう言った。

「児玉さんの言うのはいつも正論だけど、経営っていうのは次元が違うんだよ・・・」と。

頭にくることはなかったが、「次元が違うんだ！」というのは何なんだろうという気になった。

後年、将来経営者の心がわかり、経営者と対峙するためには、
「実際に経営者になってみるのが一番の近道か」と思った最初のきっかけは、
この社長の言葉だった。

2番目のボスがその後も税務を任せてくれ、多い時には20件近くをやっていた。

個人や法人の税務をやる中で、「確かにプロっていうのはパーソナルだな」
「クライアントとの人間関係が重要だな」「税務調査の対応をどう乗り切るかが重要だな」
と思った。

後年、会社を立ち上げ、資金困窮の中で、家庭の生計を支えられたのは、この税務のおかげだ。

2番目のボスは、東京の下町の荒川区の三ノ輪の生まれだ。

私は足立区の生まれで、「どっちが育ちが悪いか」を冗談で言い合って、笑い合っていた頃を思い出す。

2番目のボスが小さい頃、母親からよく、こう言われた。

「●●（名前）！ 自分が一番損する様に生きなさい。」

最初に聞いた時に、衝撃を受けた。

「自分に力がなければ、損する様に生きられない。損する様に生きると、ストレスを抱えることはなく、周りが『あいつは馬鹿だけど、協力してやるか』ということで『運』が広がり、成功して行く。」という意味かと思う。

私の心に最も響いた言葉である。

「ボス」と「2番目のボス」に共通することは、
「権威や地位やお金に執着しない」
「人の悪口を言わない」
「損な役回りを引き受ける」
「弱い立場の人への思いやりがある」ということだ。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

会計士2次試験を受験している時に、旧監査基準の前文にこういう表現があった。

「職業的会計人とは、高い専門的な能力と高度な人格を有し、・・・」

「高度な人格」

という言葉が何か違和感があり、頭に引っ掛かっていた。

後年、私が会社を起こし、社員によく、こう言った。

「プロフェッショナルに必要な要素は、『70%は人格』『30%は創造力』だ。」

「プロフェッショナルとしていかに人格が重要か」

ということを教えてくれたのは、「ボス」と「2番目のボス」だ。

今も心から尊敬している。

第10回 ～開示書類作成ソフト開発へ～

についてお話ししたいと思います。

● 経営者のための開示支援

「将来経営者と対峙できるプロにどうしたらなれるか」

そんなことを考えていた。

時々、監査クライアントが業務改善の為に著名な会社へ多額のフィーを払って、コンサルティングをしてもらっていた。

しかし、ほとんど改善内容は定着化せず、風化して、失敗に終わっていた。

「どうして、コンサルティングは失敗するのか？」

「本物のコンサルティングとは何なのか？」

その手段として、二つの点に注目した。

一つは、

「改善結果を明確化する」為の 「(1) システム化」

もう一つは、

「人の意識変革と定着化を図る」為の 「(2) 教育サービス」

問題は「どういう分野をターゲットにするか」だった。

経営者以上に、会社のことを深く理解できている者はいないはず。

まして、外部の者が業務改善提案をしても、社長が感銘する結果を生み出すことは不可能に近いだろう。

私が選んだテーマは、「キャッシュ・フロー予算の作成」と「法定開示書類の作成」の2つだった。

● テーマその1 「キャッシュ・フロー予算の作成」

1996年当時もすでに「キャッシュ・フロー経営」の重要性は広く知られていた。

ただ素朴な疑問があった。

「キャッシュ・フロー経営なのに何故目標となるキャッシュ・フロー予算がないのか？」

そんな時、監査法人で「(仮称) 月次予算実務」という書籍を出筆するプロジェクトが立ち上がった。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

私は「予算編成実務」の担当になった。

本屋を片っ端から探したが「予算作成を具体的に説明した本」は一冊もなかった。

「えっ！何故ないの？」・・・「しょうがない。自分で創るしかないか。」と思った。

まずは実際の予算実務について、5・6社の上場会社にヒアリングを実施した。

予算は具体的には膨大な EXCEL シミュレーションなので、全体像を把握するため「予算作成の数値モデル」を作ることにした。

よせばいいのに、原価計算のある製造業をモデルにし、歩留率や消費税や部門間の社内取引を含む 170 シートを超えるマクロモデルを作り、予算損益計算書、予算製造原価報告書、予算貸借対照表、月次資金計画書及び予算キャッシュ・フロー計算書の自動作成モデルを試行錯誤で作成していった。

ある数値やある要素を新設したり、変更すると、予算貸借対照表の数値が合わない。その原因を探す。途方もない試行錯誤の末に完成したのは、着手から3年後だった。

私の原稿の遅れも一因となり、書籍プロジェクトは消滅した。

私は罪滅ぼしの気持ちもあり、キャッシュ・フロー予算モデルをベースにした内容を原稿にし、監査法人へ提出した。

ある日、清文社の責任者の方がその原稿に目を通し、「これを書籍化したい！」と推奨してくれた。

友人の会計士の協力を得て、『企業予算編成マニュアル』（共著）＜清文社＞を完成した。

2000年に発刊された。意外と評判になり、その後4回増刷された。現在は絶版で在庫はない。

個人的には「キャッシュ・フロー予算」には経営者も高い関心を持つと思っていたので「システム化」をしたかったが、監査法人の監査との接点では非常に希薄だった。

そこで、実際のシステム化は「法定開示書類の作成」から着手することになった。

● テーマその2「法定開示書類の作成」

「もう一つのテーマ」は「法定開示書類の作成業務」だ。

「商法計算書類等(現在の会社法計算書類等)、決算短信及び有価証券報告書の3つの法定開示書類の正確かつ迅速な作成」である。

中でも、株主総会に係る商法計算書類等(現在の会社法計算書類等)の正確性は絶対だった。

ある時、監査法人の「ボス」がこんな話をしていた。

「日本の監査は、有価証券報告書の証券取引法監査（現在の金融商品取引法監査、以下同

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

じ。)からスタートした。その当時は、有価証券報告書は株主総会終了後に提出するもので、証券取引法監査は非常に軽視されていた。

昭和49年に商法監査が入り、上場会社の株主総会スケジュールに組み込まれて、監査の市民権が得られる様になった。」

決算の商法監査は、商法計算書類の監査が中心だった。

「商法計算書類をどの様な手順で作成するか」という作成理論はなかった。

会社も監査法人も試行錯誤で一緒に商法計算書類を作っていた。

「やっとできた！」と、思ったのもつかの間、「すいません。売上高の消費税処理が間違っていたので、商法計算書類を修正しなければなりません。」と・・・。

「えっ。嘘でしょう。作り直すの？」と絶句する。

商法計算書類の「修正組替」や「再計算」や「修正転記」や「再照合」を行う。

監査が終わっても、夜に「あの修正は商法計算書類のあそこを修正したけど、あっちも直さなきゃいけないよな。あそこの検証は正しくしたかな・・・。」と不安が駆け巡って行く。

精神衛生上良くない。

人間誰しも間違いはある。一定の範囲で許容されるべきである。

会社の業務でのミスは非公開で、表に出ることはない。

しかし、商法計算書類は、株主や債権者に開示される。
間違いがあれば、訂正され、その事実も公開される。

もし、株主総会の場で、こんなやりとりがあったら・・・。

株主：「報告議案の計算書類の・・・の数値と・・・の数値が合わないけど、間違っているんじゃないの？」

社長：「大変申し訳ありません。作成時のミスです。」

株主：「おたくの会社のレベルはこんなレベルなの。これじゃ経営も押して知るべしだな。」
「監査法人も監査しているんだろ。」

「株主を馬鹿にしているんじゃないのか。」・・・

社長は対外的に「大きな恥」をかくことになる。

その怒りは、当然「経理マン」と「会計士」に向かう。

「商法計算書類の訂正」は、「決算の失敗」であり、「監査の失敗」を意味する。

膨大なチェックの果てに、「烙印を押される」としたら、まさに「割に合わない」ことになる。

鉄鋼商社で「経理マン」であり、当時「会計士」でもある自分の立場からすると、

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

「経営者から軽んじられて行くこと」はどうしても我慢ができなかった。

「経理マンは、将来の経営層を担ってゆくべきだ」

「会計士は、将来経営者と真剣に対峙して行くべきだ」

と深く思った。

決算の大事な時に、商法計算書類の「組替」「計算」「転記」「照合」に経理マンも会計士も「忙殺されている」ことは「ナンセンス」だ。

もっと、「プロとして高度な判断をする」為の時間を創出することが必要だ。

こんな思いから、世にない商法計算書類の「組替」「計算」「転記」「照合」を自動化するシステムを創ろうと決意した。

● 業界初、商法計算書類の自動作成

まず、証券関係の資料室で上場会社の招集通知を 200 社コピーし、それを項目ごとに整理し、普遍的なデータの流れやチェックの流れを整理した。

次にこの内容を仮想のモデルをエクセルプログラムに落とし、内容を検証し、完成させた。

問題はシステム開発だ。お金がない。監査法人からも出ない。

.....

中学時代の親友が制御系のシステム開発会社を起こして、社長をしていた。

ある日、監査法人の「2 番目のボス」と一緒に、巣鴨の小料理屋で「友人の社長」と会った。

「●● (名前)。 見えない風に背中を押されているんだ！ 協力してくれないか。」
と思いがけない言葉を発していた。

友人の社長は、しばらく考えて、こういった。

「わかった。」

硬い握手をした。

帰り、「第2のボス」と「友人の社長」が同じ方向で、タクシーで帰って行った。

後で、「友人の社長」がこんなことを言っていた。

「タクシーの中で、『児玉をよろしくお願いします。』と何度もお願いされ、心動かされたよ。」と。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

本当にただただ、頭が下がる思いだ。・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

鉄鋼商社の「恩人の上司」は、私の退社が原因で飛ばされた。

「自分の浅はかさ」をどれだけ嘆いたかわからない。

にもかかわらず、2次試験に合格して、報告に行った時に、本当にわが子のことの様に喜んでくれた。

その後、「ボス」の了解を得て、結婚の仲人をお願いした。

「恩人の上司」に「商法計算書類自動作成システム」の話をした。

「兎玉。それは面白いよ。俺も手伝うよ！」と言ってくれた。

「友人の社長」の会社の若い開発者が時間外の夜間や休日に開発の仕事をしてくれた。

監査が終わると、恩人の上司と一緒に、府中にある友人の社長の会社へ行き、土日も行って、若い開発者と意見交換しながら試行錯誤で開発をしていった。

膨大な業務テストは恩人の上司と私が行った。

友人の社長の会社は制御系のシステム開発だったので、特殊な領域であり、かなり戸惑っていたと思う。

完成まで4年かかった。

若き開発者たちのひた向きの姿勢に支えられて、完成できたと思う。

友人の会社には、大きな先行投資をさせてしまった。

何としても投資回収しなければならなかった。

ただ、パッケージシステムの営業についての経験も営業活動の資金源などもなかった。

● スリー・シー・コンサルティングと決算報告エクスプレス

「恩人の上司」が知り合いの「業務系のシステム開発会社の社長」を紹介してくれた。

「商法計算書類自動作成システム」の説明をすると、「面白いね。協力するよ。」と
いってくれた。

業務系システムとしての補正や営業活動拠点の事務所を提供してくれた。

「友人の会社：システム開発」、「業務系のシステム開発会社：営業」及び「企画・サービス：恩人の上司と兎玉」の共同事業でスタートした。

契約上、個人でなく会社の方が良いということで、「2番目のボス」の紹介で、休眠会社を低額で購入した。

商号は、「会社の名前を見て、これってどういう意味だろう？」と考えてもらった方が
良いと思い、「スリー・シー・コンサルティング」とした。

3つの「C」の意味は後で意味づけした。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

能力としての「Creation（創造）」
人格としての「Confidence（信頼）」
人格としての「Consideration（思いやり）」である。

.....

商法計算書類自動作成システムの名前を「決算報告エクスプレス」と命名し、商標登録した。特許の申請も行なった。

後年、補強申請も行ない、平成 22 年に正式特許取得ができた。

2000 年 4 月に「商法計算書類自動作成システムリリース」の記事が新聞に掲載された。

同年 9 月に大学時代の友人の会社の場所で、「第 1 回の決算報告エクスプレスセミナー」を開催した。

上場会社へ飛び込みでチラシを配って回った。

上場会社の経理の部長や課長が 11 名ほど参加してくれた。

「良くこんなマニユアックなシステムを開発したね。」

「確かに開示書類の手作業業務大変なんだよな。」

デモ説明を聞きながら、みんな大きくなずいてくれた。

評価は高かったが、こんなどこの馬の骨ともわからないベンチャー企業のソフトを上場会社が買うはずもない。

次の 3 つの営業戦略を始めた。

- ① 「ソフトの無償貸出」
- ② 「ソフトへの無償代行入力」
- ③ 「企業予算編成マニュアル（清文社）の書籍寄贈」

①と②により、「お客様とデータのやり取りが発生し、入力後のデータはできたら使いたい」という思いになり、関係者も閲覧できるので、可視的に評価をいただくことができた。「君たち、どうしてここまでやるの？」という同情にも似た気持ちを持っていただいたのかも知れない。

③は、稟議申請する際に、『企業予算編成マニュアル』を書いた会計士が作ったソフトなので信頼して下さいというメッセージを送る為だった。

バタバタと 10 社程の上場会社がソフトを購入してくれた。

今思うと、「よく購入してくれたな」と不思議に思う。

当時、商法計算書類は、法令はほとんど変わっていなかったもので、後は単純に売って行けばいいと思っていた。

その後、50 年ぶりの商法大改正などが始まるとはまだ思っていなかった。

第 11 回 ～ベンチャー企業の起業へ～

● 覚悟

「決算報告エクспレス」は、当初「5年間の使用権」付与という形で販売していた。そこに、思いがけないニュースが入って来た。

50年ぶりの「商法大改正」である。

すでに数十社の上場会社等がソフトを購入していただいていた。

.....

「商法大改正の為のプログラム開発」をしなければならない。
もうこれ以上、「友人の社長」のシステム会社も投資資金負担はできない。

いきなり窮地に追い込まれた。

営業を支援していただいた「業務系のシステム開発会社の社長」は、大手開発会社を辞めて、一からシステム会社を立ち上げて、悪戦苦闘をへて優良会社にした本物のベンチャー経営者だった。

「児玉さん。 どうするか？ 事業をたたむか？
監査法人を辞めて、この事業を責任をもって経営して行くか？
もし、継続する覚悟があるなら、付き合うよ。」

絶句した。

経営者になって会社が潰れば、家族にも迷惑がかかるし、会計士や税理士の資格も失う。

まだ、娘は幼稚園だ。・・・でも、この逆境から逃げるのか。・・・
それはできない。・・・ 生死を分けた登山。
神様から救ってもらった命。・・・ これも運命として、覚悟を決めよう。

しばらくして、「わかりました。・・・」と答えた。

● 決意を伝える

「監査法人を辞めて、会社経営に専念する」旨を伝えた。
監査法人の「ボス」も「第2のボス」も絶句した。
「監査業務を引き継いでほしい。」と思っていた。

・・・最後は認めてくれた。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

.....

当然、家族や親戚中から、大反対にあった。
「自分を信じてくれ！」と言うしかなかった。

● お金の問題

三社共同事業をスリー・シー・コンサルティングに一本化した。
三社からそれぞれ代表と「恩人の上司」が取締役に就任し、私が代表取締役に就任した。

まず、「運転資金としてのお金」が必要だ。
開発会社への支払いも開始しなければならない。

.....

「業務系のシステム開発会社の社長」の懇意の地方銀行へ融資相談へ行った。
「担保がなければ借入はできない」とのこと。
家内の母は、17歳で長野から大塚に出て来て、長年商売をしてきたプロだった。
多くの修羅場をくぐり抜けて来た。大切な洋品店の土地を担保に提供してくれた。
そのおかげで、運転資金の借入をすることができた。

その義母は、今はもうこの世にはいない。
時々お墓参りに行き、手を合わせて、報告をしている。

.....

秋葉原の神田川のビルの一室を借り、会社としての本当の事業が始まった。

数人の社員を前に私はこう言った。

「うちの会社はベンチャーだ。
ベンチャーは崖から人力の飛行機を飛ばす様なものだ。
奇跡を起こし続けなければ、飛び続けることはできない。
一緒に奇跡を起こそうぜ！」

情熱だけで生きていた。それでもパッケージソフトの販売は思う様に伸びない。

通帳の残高は日々減って行く。

.....

ある日、夜遅く大塚駅から自宅のマンションへ続く坂道を歩きながら、
「来月で会社は終わってしまうのか？」・・・とふと思った。

それでも妻と幼い娘の寝顔を見ていると、

「絶対に家族を路頭に迷わせるものか！」
という強い気持ちがこみ上げてきた。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

若い頃はわからなかったが、一人では乗り越えられないが、
家族がいてこそ乗り越えられるのが「真理」だとしみじみ思った。

.....

資金も底をつこうとしていた。
赤字だったので、新規の借入金は難しかった。
ベンチャーキャピタルから資金を調達をすることにした。

懇意にしていたユーザーの経理部長に「決算報告エクспレスの評価」に
ついて話をしてもらいたい旨のお願いをした。
今思うと「とんでもないお願いをした」と思うが、当時は必死だった。

経理部長は快諾してくれた。

ベンチャーキャピタル向けの説明会を開催し、私が事業の経緯・今後の展開をプレゼン
した。
その後、経理部長が本当に踏み込んで、「非常に有用なソフトであること」を説明し、
質疑にも的確に応じてくれた。
ベンチャーキャピタルの出資が決まった。

間一髪で生き残ることが出来た。

第12回 ～会社経営の道～

● 悪戦苦闘

ベンチャーキャピタルからの出資により、資金繰りの崖っぷちから逃れた。
開発体制を強化して行くことも可能になった。
でも、上場を目指すことと株主への説明責任が新たに生じた。

.....

商法大改正に始まり、その後開示法令が変わり、膨大なシステム開発が生じた。
特に法令に関するものだったので、膨大かつ多様なテストが要請された。

株主から色々苦言を告げられた。

「児玉社長。お友達倶楽部じゃ困るんだよ。」
「開発コストはかかりすぎだ・・・」

財務取締役からも

「児玉社長。社長はすべての社員に対して公平でなければいけませんよ。」
と、アドバイスされた。

.....

社員も増えて行き、「組織のマネジメント」を考えていかなければならなくなっていた。

もともと組織がイヤで会社を辞め、自由人として生きて行く為に会計士になったはずだった。

でも、現状は、組織の鎖に手足を縛られているように思えた。
すべての責任と批判は経営者に向かう。

本当に割の合わない、理不尽な世界だ。
もし、一個人だけの感情だったら、
千回は怒りで「お膳をひっくり返していた」と思う。

でも、経営者は「私人」ではなく、「公人」だ。
「神様から経営者の『役』を演じなさいと言われているんだ」
「誰からも理解されなくていい。神様だけには理解してもらえる生き方をしよう」
「とにかく、自分が一番損する様に生きよう」
と言い聞かせていた。

会社の業務に関しては、守秘義務にも関連するので、これ以上は書けません。
その後現在に至るまで、悪戦苦闘が続いています。

現在は、宝印刷株式会社の連結子会社になっています。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

● ひと

経営は、「お金の問題」と「人の問題」の2つだと思う。

特に、「人の問題」は永遠に続くのだろうと思う。

.....

小学生の頃、叔父とよく将棋を指していた。
やがて叔父に勝つようになった。 祖父は、囲碁の強い人だった。
ある日、祖父と将棋をさすことになった。

祖父がこう言った。

「自分は飛車角抜きでいい。」

「えっ。飛車角抜きで勝てる訳ないじゃない。」と思った。

ところが、ものの見事に負けた。

啞然とした。

.....

社員一人一人は、「素晴らしい所」と「苦手な所」がある。

「金（駒）」のタイプの人もいれば、「銀（駒）」のタイプや「桂馬<ケイマ>（駒）」のタイプもいる。

「飛車（駒）」のタイプの人「角（駒）」のタイプの人もいる。

もちろん「歩（駒）」のタイプもいるし、ある日「ト金（駒）」になる人もいる。

「桂馬<ケイマ>（駒）」の一手が勝負を決める場合もあるし、「歩（駒）」の一手で勝負の局面を変える場面もある。

全ては、指し手としての「経営者の腕」しだいである。

経営はまさに「人財将棋」の様に思う。

でも、私の実力は「最下位」のレベルだろう。

.....

未熟な私がここまで経営を続けて来れた「精神的な支え」は、
「ひた向きに働く社員の後ろ姿」だった。

「みんなの頑張りが報われる世界にしなければ・・・」

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

という衝動に何度駆られたか、わからない。

● メッセージ

2007年4月。14歳の娘の誕生日に、
「娘」と「会社の社員」への気持ちを重ねて創った曲がある。

曲名：「 Happy Birthday To You 」

1

大人の階段一つ上って
まだ見ぬ夢に向かって
歩き続ける 愛しい君よ。
眠れない夜、涙の夜が君を苦しめるだろう。
すべてを受け入れて生きて行こう
かかとを下ろして、生まれたままで
Happy Birthday To You
～繰り返し～

2

信じていた者に裏切られて
賭けた夢に破れて
ズタズタになることもあるだろう
それは神様が与えた坂道さ
覚悟を決めて行こう
すべてに感謝する心を持った時
まだ見ぬ君にきっと会えるさ
Happy Birthday To You
～繰り返し～

3

君の血潮に流れるもの
この世にいない愛しい人の
励ます声が聞こえるだろう
世間の物差しに惑わされることはない
自分らしく行こう
損得の世界に流されることなく
神様が決めた道を信じて行けよ
Happy Birthday To You
～繰り返し～

● ころ

経営者になった最初の1年が過ぎた時、経営者の1年は本当に大変だけど、20年分の価値があると思った。

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

また、人間としての「心の成長」がなければ経営は続かないと思った。

特に次の点は大切だ。

- 1 「周りの人への感謝の気持ち」
- 2 「自ら逆境へ立ち向かうこと」
- 3 「人の悪口を言わないこと」
- 4 「弱者への思いやり」
- 5 「愚直に生きること」
- 6 「執念は燃やしても、執着はしないこと」

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

第13回 ～「もう一つの夢を追いかけて」～

第1回目からお読みいただきありがとうございました。

お読みいただいております様に、私の生きてきた道は、「脱線」と「失敗」の連続です。それでも転落して来なかったのは、「周りの人の支援があった」からです。

自分は本当に「運のいい」人間だと思います。

でも、その「運」は、見るに見かねて手を貸してくれた「多くの人のおかげ」です。

どうして、多くの人が手を貸してくれたのでしょうか？

おそらく「不器用で、愚直な生き方をしてきた」からではないかと思います。

「カッコいい生き方」は、「羨ましい」とは思っても
「力になって上げよう」とは思いません。

「愚直な生き方」は、「しょうがね～な。あの馬鹿の為に、一肌脱いでやるか」という気持ちが生まれ、それが「運」になって行くのではないのでしょうか。

大人の常識に反抗し、遊び呆けてきた幼少時代。

マアジャンにのめりこんだ学生時代。

社会人になり、経理から会計士を経て経営者になった。

つくづく「人が大事だな」「人の心が大切だな」と思う。

経営の本質は、「お金」と「人」です。

財務諸表の貸借対照表には、大事な財産が載っていない「人財」です。

本当は、「人財価値を示す人財貸借対諸表」があるべきだと思う。

「10人の会社が3人の価値にしかない場合」と

「10人の会社が30人の価値になる場合」では、

企業の成長や将来の貸借対照表には大きな差になる。

「オフバランスの人財価値をいかに高めるか」が経営の命題です。

その結果、オンバランスの「お金」を示す貸借対照表が改善される訳です。

経営者も社員も、また担当会計士も担当税理士も投資家も債権者も

「会社が将来どうなるか」が最大の関心事です。

会社の将来の姿、目標を示すのが「予算」です。

「お金」の面の将来の会社の姿を示すのが「予算財務諸表」です。

すなわち、「予算損益計算書」「予算貸借対照表」「予算株主資本等変動計算書」

私の履歴書：脱線記 NO.1～13

「予算キャッシュ・フロー計算書」及び「月次資金計画書」です。
会社の目標としての「予算財務諸表」を実現するためには、

裏付けとしての「人の行動」と
目標に挑戦する高いモチベーションを醸成する「人事評価制度」が
不可欠です。

予算財務諸表作成についての「共通理解」と
目標達成による「公正な人事評価制度」が構築されることにより、
「オフバランスの人財価値が大きく上がってくる」訳です。

実績の財務諸表を作成する理論が「会計」です。
ところが、経営目標である「予算財務諸表」の作成理論は世の中にありません。
そこで、「予算財務諸表の作成理論」を「予算会計」と定義しました。

予算会計を創っていける人は、前提として会計を深く理解していることが必要です。
そこに一番近い人は、「経理」の方です。又は会計を理解している実務家です。

専門家としては、「会計士」や「税理士」の方です。
一緒に、「予算会計を学ぶ」中で、
現実の「教育」「システム」「予算編成業務の改善」等を繋げて行き、
「(1) 経営者」と「(2) 経理」と「(3) 会計士・税理士」の
「信頼のトライングル」を
創り上げて行きたいと思っています。

「予算を作らない企業」はありません。
「予算を完璧に作れている」と思っている企業は、世の中に一社もないはずで
巨大なニーズが眠っています。

暗いニュースの多い世の中ですが、
夢のある「予算会計の新たな市場」を創り、
「予算会計コンサルタント」として活躍して行ける世界を
一緒に創って行きませんか？

これから、「予算会計ブレイン」として
一緒に「予算会計」を学んで行きましょう。

最後までお読みいただきありがとうございました。

2014年7月

株式会社 スリー・シー・コンサルティング
公認会計士 児玉 厚